琉球大学学術リポジトリ

ハニ族の棚田
ー千年の労作から世界文化遺産候補へー

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学法文学部
	公開日: 2011-07-21
	キーワード (Ja): ハニ族, 棚田, 農耕儀礼, 世界遺産, 農具, 雲南
	キーワード (En):
	作成者: 黄, 紹文, 稲村, 務(訳), Huang, Shaowen, Inamura, Tsutomu (trans.)
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/21233

神林の祭祀

蛇の日の９日の昼12時ごろ、ミグと助手は１頭の太った豚を用意し、大鍋を背負って神林に行った。村の各世帯１名の成年男性が出席し、祭祀の期間、女性は林の中に入ることは厳禁であり、男性も靴を履いたり赤や白の服を着たりすることは厳禁である。皆で豚を殺し、豚肉を分けて煮た。豚の頭の肉、レバー、腹の肉などを細かく切って特定の土碗に入れ、３碗の茶、３碗の生姜湯、３碗の酒、丸ごとの１羽の鶏、１包みの黄色いおこわが竹で編んだ食卓に並べられた。その後、神林の下で三回拝礼し、１回ごとに三回拝礼をして三回跪いた。祭祀が終わると、ミグは供物を祭祀に参加した人々に分けて食べる。これはアマの神林の庇護を人々が受けることを示している。その後祭祀に参加した人全員が神林の中で、祭祀で屠られた家畜の肉を食べる。これらの食べ物は持ち帰ってはいけない。

写真28　肉の分配（訳者撮影 元陽県 1996年）

蛇の日の早朝、各家では祖先を祀る。供物は１碗ずつの茶、酒、豚肉、黄色いおこわである。祖先祭祀は家庭の男性の年長者が司る。祭祀が終わると家人たちは祖先の祭壇に三回跪いた後、黄色いおこわを食べてよい。

馬の日の10日、別の1頭の太った豚を殺し、同様なやり方で小さな神林のアマを祀る。祭りに参加した人は供物を一緒に食し、持ち帰ってはならない[注釈15]。

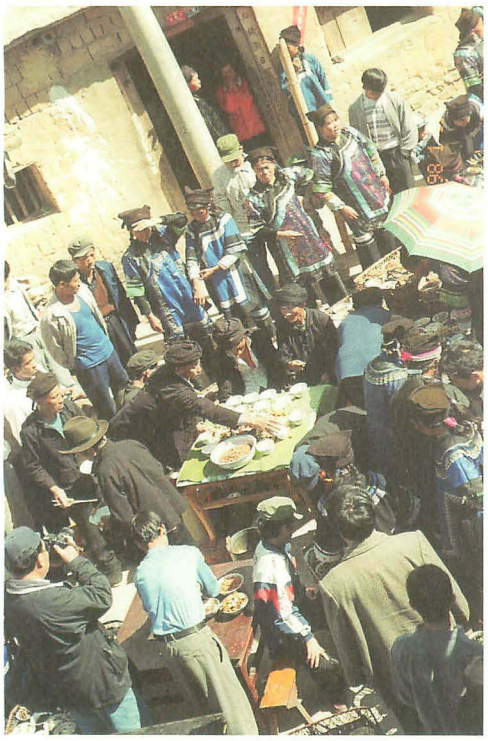

写真29　哈播村のズィゾゾ
（訳者撮影1998年）

羊の日の11日、村民は忌み日に入り、農事や針仕事など一切の生産活動をしない。青年男女は山に登って遊んでよい。猿の日の12日にミグの家の庭でズィゾゾziilz oqzoqを行う。これは招いた村内の老人たちや歌手たちと一緒に宴を設け、ハニ族の遷徙、村落への定住、節日の由来などの内容の歌を歌ってもらうということを表している。また、その年生まれた男の子のいる父母はまた１卓の酒宴を準備し長老たちに味わってもらう。これは３年続けられるが、男の子がアマ神の庇護の下、平安無事に成長することを示している。13日に節日は終了し、村民は田仕事を始めてよい。元陽県の哈播村などのように場所によってはズィゾゾを全村でやるところもあり、各世帯で１卓ずつ10品目以上のおかずを出し、２日間に分けて行う。

[訳注15] 著者は説明していないが、これは全村で村の神林であるアマを祀った後、各リニージで持っている神樹への祭祀であると考えられる[稲村2004a,2004b,2010参照]。

ハニ族の１年１度のアマト祭りは、暦から見ると春が来て冬が去ったことを示している。棚田の農耕からいえば、種蒔きを意味し、春耕の始まりである。そのため、者台村では蛇の日には朝食の後、苗代田に行って芽の出た籾を蒔き、黄色いおこわと赤い鶏卵を苗代田に捧げる。トウモロコシ、黄豆なども節日の前後に蒔き終わらければならない。

写真30　アマトの長街宴

（2）カオポ　Kalhho po

カkalは作物の意で、オhhoは「門」、ポpoは「開ける」ということで「作物の門を開ける」という意味になる。この節日は陰暦３月の田植え前の龍の日に行われ、期間は１日間である。この節日の特徴は、家々で「七里香」Buddleja officinalis Maxim.の花で染めたおこわを食べることである。紅河県のハニ族はこの「作物の門を開ける」儀式のを当日の午後行い、人々は装いを新たにする。特に年頃の青年男女と新婦は装いを凝らす。彼らはこの日を「稲の娘」の嫁に出る日とみなしており、自分の家の田の田植えを手伝う親戚友人が来る。まず、その家の主婦が１把の苗を抜き取り、それを田に植える。その後、村の中で、高齢かつ威信のある、経験豊かな長老が田植えをし、その後全員で次々と田に入って田植えをする。長老が植える最初の１把がうまく植えられるかどうかは、その年の田植え全体の成否を表している。そのため、経験豊富な長老が最初の１把を植えなければならないし、それによって来年の豊かな収穫が保障されるのである。節日には黄色いおこわ、赤い卵を用意し、それを田の一角において、天神が遣わした鳥であるカッコウに捧げる。ハニ族に春が来て田植えをするようにということを報せてくれたことに感謝するのである。また、一方で黄色いおこわを田植えに来てくれた親戚友人に振る舞う。黄色いおこわ

は来年実る稲のように黄金色であること、赤い卵は籾に実が入っているということが象徴されている。

（3）ミネナ　Miqnieiq naq

写真31　ミネナで祀られる道具

ミネナまたはモゲナmoqngeiq naqという。文字通りには「仕事を休む」という意味になる。この節日を過ぎると、もう種を蒔かないということからこの名がある。一般に陰暦４月に行い、具体的な日取りは田植えの時期の早い晩いにもよるため各地の日取りには違いがある。ここでは緑春県大興鎮阿落坡頭村で行われたミネナを例として挙げる。阿落坡頭村のミグの家の「作物の門を開ける」儀礼の後、「十二支」が２巡した日がミネナの吉日とされた。言い換えると、ミグの家が陰暦３月の最初の馬の日に「作物の門を開ける」儀礼をしたとすると、陰暦４月の最初の馬の日がミネナの日ということになり、十二支が２巡でちょうど25日開いているということになる[訳注16]。

1997年５月17日（陰暦４月の最初の馬の日）この村ではミネナが行われた。全村で1頭の太った豚を殺し、各世帯に均等に配分しそれを主な供物とした。午前中まずミグの家の祖先を祀った。供物は茶、酒、米飯、餅（もち米の）、煮た豚肉（赤身、肝、腸詰め）を３碗ずつと、１碗の塩皿を祭壇に置き祖先に捧げる。祖先祭祀が終わると、その供物を家畜のいる部屋[訳注17]に運び牛にそれを捧げ、少しだけ牛にも食べさせた。最後に屋外に掛けてある犂や耙のあるところでそれを祀った。これらは棚田農耕に密接な関係を持つ家畜や農具に対する慰労を表し、この日からそれらは半年の間休むということを意味している。最後に爆竹が鳴って、村人にミグの家の祭祀が終わったことが告げられ、各家庭ではミグの家に倣って家々の祭祀が行われた。

午後は水源を祀る儀礼を行う。これは各家庭で行い、各自の家の田の入水口のところで執り行われた。雄鶏と雌鶏を１羽ずつ屠った。田の畦の一角で火を起こして鍋を置き、鶏を処理して洗った。葉のついた木の枝を入水口のところに立てて供物台が置かれた。最初に捧げられたのは、茶、酒、米（生米でその上に生卵を置く）、塩を１碗ずつと９つの白い小石であった。石は来年実る穀類に石のように身が入ることを象徴している。２度目には、茶、酒、塩、鶏肉と鶏の内臓の煮物、ゆでた鶏卵をそれぞれ１碗ずつ捧げ、これらを少しずつ葉の上に置いた。これは祭祀が終わったということを示している。

ミネナは暦法からすると春から夏に入ることを示している。棚田農耕の順序からすると、田植えの時期が終わり、これからは除草や田水の管理などの夏の棚田の管理の段階に入ったことを示

[訳注16] ハニ族の「十二支」の数え方は羊から始めて羊で終わる。そのため１周期は１２ではなく１３で１周期とするため、２周期は２５という表現になる[稲村1997参照]。
[訳注17] 家畜小屋を建てる場合もあるが、通常ハニ族は床下に牛、豚、鶏、アヒルなどを飼っており、人はそこから階段を上がって２階に居住している。

している。

（4）デロホ　Dei'laoq hoq

「田地の祀り」という意味である。2004年５月１日（陰暦３月13日、龍の日）に紅河県楽育郷尼美村でデロホ儀礼が行われた。この日はこの村の「作物の門を開ける」儀礼から３巡目の龍の日に当たる。場所は村の下の棚田が見渡せる草叢で、１本の喬木（特に栽培している必要はない）があるところであった。100キロ超の太った豚が1頭屠られ、雄鶏と雌鶏１羽ずつが捧げられた。儀礼を司るのは３人で、午後２時ごろ太った豚を連れ、鶏を抱いて祭祀場所に行き、臨時に鍋を置いて火を起こし準備をした。各世帯では１人ずつ成年男性を出し豚や鶏を処理する手伝いをした。肉が煮えて供物が揃った午後4時ごろ、柳の木の枝、「蜂蜜花」（ハニ語：aolbiq学名不明）の枝の葉などを臨時に建てられた供物台の上に他の供物とともに並べた。並べられたのはつけ汁（山椒などが入ったもの）、酒、煮た鶏１羽、煮た豚のレバー、塩皿をそれぞれ１碗ずつと、３個の餅（もち米のもの）である。儀礼を司る者が祭詞を一通り吟じ、参加者は田野に向かって三度跪き祭祀は終わった。その後、人々は組に分かれて夕食を取り、煮えた豚肉を各組で平均に分配して食べた。「田地の祀り」の意味するところは「増神」[訳注18]を招いて稲田を守ってもらうということにある。

写真32　デロホ　紅河県楽育郷

（5）クザザ　Kuzaq zaq

イェクザYailkuq zaq、ゼクザSseilkuq zaqともいう。一般に陰暦６月に行われ、そのゆえ漢語では「六月節」と呼んでいる。この節日の日取りは一般に田植えの終わる時期に関連しているため、各地で行われる時期が違う。ここでは元陽県の攀枝郷東林寨のハニ族が1997年8月26日に行った「六月節」について具体的に述べることにする。東林寨の「六月節」は陰暦６月の２

写真33　アチョ小屋の屋根葺き

[訳注18]「増神」というのはハニ語で何にあたるかはいくつか考えられるが、dei'laoqのロlaoqに「増す」「殖える」といった意味があり、それに因んだ神霊と考えられる。この発音は漢語の借用語の「龍」と同一であり、「龍神」や「龍王」と習合している可能性があるが、本来は別のものであり[稲村2008:132-138]、著者も否定している[６節３参照]。

度目の蛇の日から始まり、陰暦７月の最初の豚の日の朝にブランコの縄を切って、シーソー（アジョaqjaolまたはドメdaoqmeiv）を支柱から下ろして節日が終了したことを宣言した[訳注19]。節日の期間は13日間であった。しかしながら、主な活動は８月26日～28日の３日間であった。

８月26日（蛇の日）の主な活動内容は次のようであった。早朝、各世帯では意識して自分の家の１把の茅（約25キロ、シーソー横の共同小屋の屋根を葺くため、以下この小屋のことをアチョhhaqqaol小屋と呼ぶ）を持ち寄り、各世帯では少なくとも１名の成年男性がシーソーの支柱、横木を皆で作るのに参加する。この横木は林から伐採し、比較的真っ直ぐで硬い種類の樹であればよい。昼12時ごろ、各世帯から茅を持った人たちが「村建て」をしたときに指定されたシーソーのある広場にやってきた。各世帯からの男性たちは分かれて、アチョ小屋を作り、ブランコ（アグalhhe）のための台の木組みを作り、またシーソーの支柱を作ったりした。

写真34　小屋（アチョhhaqqaol）と広場、
中央はシーソーの支柱（元陽県上広坪　訳者撮影2003年）

８月27日（馬の日）は主にシーソーのある広場で、牛を殺して捧げた。ミグが祭祀を行い、牛は必ず水牛でなくてはならない。昼の12時ごろ牛を殺し、１碗の牛の血が供物台に捧げられた後、牛肉を分ける。牛肉は各世帯で均分され、持ち帰って各自の家で煮て祖先の祭壇に馬、羊、猿の３日間の午前に３食捧げ祀った。

８月28日（羊の日）の午後5時ごろミグと助手はアチョ小屋で祭祀を行った。ミグはシーソーを時計の針の方向へ３回回し、天神オズHhoqzyuqとシピSilpil[訳注20]を招いて「年を越す」ことを表した。ミグはブランコに乗って、田野に向かって３回こぎ、棚田の稲穂に実が入るように祈った。ミグは村に向かって３回こぎ、村の子孫たちが林の中の筍のように密に栄え、石ころのように家畜が多くなることを祈った。ミグのブランコの祭祀が終わると、人々は次々とブランコに乗り込みこいでいく。これが陰暦７月の最初の豚の日の早朝にミグがブランコの縄を切りシーソーを下ろして節日が終わったことを表すまで続く。

[訳注19] アカ種族の場合、ブランコのみのところが多く、ハニ族のなかではシーソーのみのところが多いが元陽県ではどちらもあることが多い。
[訳注20] オズとシピはどちらも天神モミMolmilの補佐役で、オズは白馬に乗って、シピは斑の馬に乗って、春の祭りに訪れ、作物を守る神霊とされる。

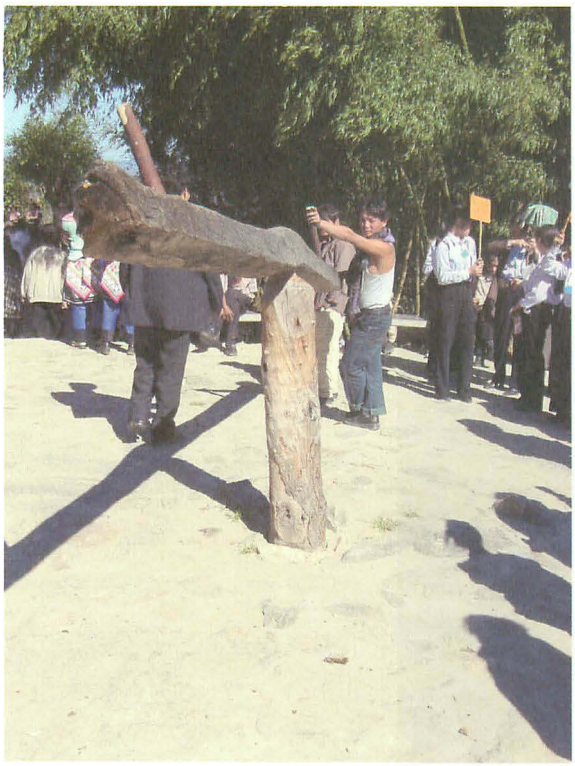

写真35　シーソー（アジョaqjaol）
元陽2003年　訳者撮影

写真36　ブランコ（アグalhhe）
墨江2003年訳者撮影

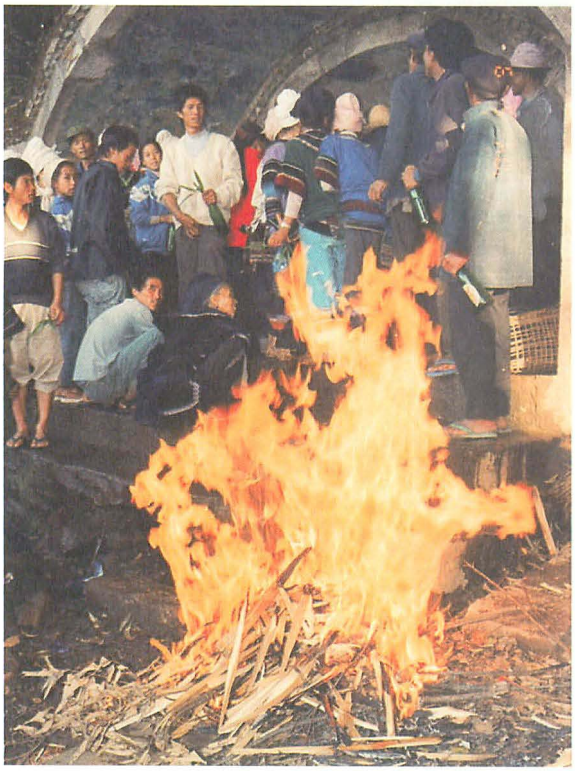

写真37　「新しい水」を取り松明を点ける

紅河県楽育郷壩美村のハニ族の「六月節」は上述とは異なる。以下では2004年５月３～11日に壩美村民が行った「六月年」の活動について簡単に述べる。５月４日つまり陰暦３月16日の羊の日、村人たちは午前中に食事を済ませた後、各世帯から１人ずつ成年男性を出して４キロ離れた古い林へシーソーの横木を切り出しに行く。その集団の中には１～２人の木工[訳注21]がいる。横木の樹はユンナンマツ（雲南松Pinus yunnanensis Franch.）でその特徴は真っ直ぐであるということである。彼らは森の中で、２本の高木の松の木を見つけた。その１本は直径35センチで根元のほうから切り倒して大体の寸法を測り始めた。木工は手を広げて５尋（約８メートル）を測り、シーソーの横木にする木を上端から路傍に引っ張ってきて樹皮を削り始めた。回転する中心のところを削り、両端の大きさを同じ大きさに削り揃えた。その後、数人の村人でそれを肩に担いでシーソー

[訳注21] 木工や鍛冶師はアボラチaqbol lavqqivqと呼ばれ、「『技術』あるおじさん」としてミグ（宗教的村長）やモピ（司祭）に比肩するほど特別に尊敬されている。

のある広場へ持って来た。各家々ではシーソーの横木が村の入り口に着いた時、帰ってきたという声が聞こえたら早速１羽の鶏を殺しその毛をむしり、内臓を処理し煮てから祖先を祀る。シーソーの横木が村に戻って来るということは天神オズとシピもまた戻ってくるということを意味するので、実際には各家々では鶏を殺して天神に捧げているのである。

写真38　シーソーの横木を運ぶ

シーソーの横木が来た後は、節日の活動は一段落する。５月５日、６日、７日、８日には具体的な活動はなく、村内の掃除や献立の用意などの準備をしている。５月９日（鼠の日）から具体的な活動が始まる。

第一にまず、井泉を清めるが、ハニ語ではロホソlolhovq soqという。祭りを司るのはプスpuqseelといい、彼らはミグに相当する。そのうちの１人はモピ（司祭）であり、あとの２人は助手で、計３人である。早朝７時前後、プスは雄鶏と雌鶏を１羽ずつ持って特定の井泉に来た。ここの井泉は神林の傍にあった。祭祀は２段階に分けて行われ、まず井泉の傍らの木や枝を使って臨時に祭壇がこしらえられ、生きた鶏が捧げられた。祭壇の横には葉のついた竹が数本立てられ、供物台の上にはつけ汁碗（山椒などが入った）１碗、酒１碗、米３碗、塩皿が置かれた。その後、鶏が殺されそれを盛り置くための碗が供物台に置かれ、プスは井泉の前で井泉の水を使ってその臓物を洗った。それと同時に、火が焚かれ、羽根や内臓が処理されて鶏は丸ごと煮られた。鶏の砂摺り（胃）を処理する時は内側の膜を破ってはいけない、そうしなければ稲の苗は虫の害を受けるとみなされている。３碗の米が煮えたころ（粥を作っている）次の祭祀が始まる。供物台の上の３碗の米は２碗の飯（粥）に換わり、鶏の血の入った碗が丸ごと１羽煮られた鶏の碗に換えられた。その他酒、つけ汁、塩皿などは変らない。モピとその助手たちは井泉に三度頭を下げ、祭祀が終わったことを表した。それから、村人たちは続々と「新しい水」を取りに入った。「井泉を清める」儀礼は未明のうちに終わらなければならない。そのため、村人たちはその時間すでに明るくなっていたとしても、松明を点し（この松明は９本でないといけない）「新しい水」を取りに井泉に行く。祭祀の供物はプスたちがすべて食べ、家に持ち帰ってはならない。

上述の祭祀の他に、９日の午前中は、各家々の門の前で鶏を１羽殺して正常死しなかった人を祀る。つけ汁、酒、飯、丸ごと煮られた鶏１羽の碗が１碗ずつ竹で編まれた食卓の上に置かれた。家の祭祀者が空の碗の中にそれぞれの供物をそれぞれ少しずついれ、門の外に撒くと祭祀は終わった。家人は食卓を囲んで供物を食した。

第二にシーソーとブランコの取り付けがある。９日の午後２時から始まった。２人の木工が主に行い、村人がそれを手伝う。シーソーの支柱を立てるため１メートルほど穴を掘る。支柱を立てる儀礼には１羽の雌のアヒルが捧げられ、穴の底にはアヒルの水かき、３個の白い小石が置かれ、その後支柱が立てられ固定された。支柱は高く地面から約２メートル出ており、頂上の横木と接する部分が細く削られた。横木の中心部分は太く、両端は細くなっており、全長９メートル

写真39　シーソーへの祭祀

ほどである。シーソーの取り付けの時には各世帯は１名ずつの成年男子を出す。広場で牛を１頭殺し、牛肉、骨、内臓は各世帯に平均に盛られ、血すらも平等に分配された。牛の皮は木鼓を包むのに使った。壩美村の「六月節」で殺された牛は雄の黄牛であった。モピは火を焚きアヒルを殺してそれを処理して煮た後、丸ごとのアヒルの入った碗を支柱の横に置き、つけ汁、酒を１碗ずつそれに加えた。モピは頭を下げ、祭祀が終わったことを示し、モピと数人の老人たちが供物を食べた。祭祀が終わったあとは皆自由にシーソーに乗ってよい。

５月９日の午後、各世帯では３本の尖らせた松の棒、３本のニラ、３本の「烏山草」(yiqciivq 和名学名不明)、３本の豆苗（大豆の苗）を竹筒の中に詰め天神の馬の餌として門の前に置いた。伝えられるところによれば、「六月年」の間、天神モミはオズとシピの２人の「神」を馬に乗せて人間のところに遣わすという。オズは白馬に、シピはまだらの馬に乗ってくるという。

5月10日（牛の日）の朝、祭りを一緒に過ごすため、嫁に出た娘が里帰りをする。彼女は２本の小さい牛肉、餅２つ、小さい酒杯１つを持って帰り、自分の祖先に祀り、その血縁関係を表す。随時、親戚や友人を呼んで食事をし、食べ終わると広場に行ってブランコに乗る。

5月11日（虎の日）、祭りは最高潮に達する。周囲の村の人々も参加してシーソーに乗り、競い合う。儀礼としては、まず朝に自分の家の祖先を祀る。供物はつけ汁、酒3碗、牛肉または鶏肉3碗、飯3碗、塩皿１皿である。午後は3時ごろ、各世帯でオズとシピを田の間に連れて行き、作物を守ってもらう。それとともに村民は老若男女問わずシーソーに乗る。若い男女は踊りを踊り、見ている中年の男女も思わず若い人たちの列に加わる。夕食の後、里帰りした娘たちは各自の家に帰る。午後4時以降、夕食はずっと続くが、娘たちは普通いくつかの大きな餅を贈られて帰る。

写真40　シーソーの競技

クザザにおいて、シーソーやブランコを立てることについてはハニ族が水を引き、田を植えてきた歴史を反映している。太古の昔、ハニ族が水路を作り、山を焼いて田を開墾していた時、山の上や地上にいる動物に罪を犯していた。ミミズや蟻は山の上で田を作っているハニ族は彼らの首をちょん切り、熊や狐たちはハニ族が自分たちの穴を壊してしまったと天神に言った。神殿の中の判事は耳の聞こえない神官で、虫や動物が脚が短く手が欠けているのを見ると、わけもわからずハニ族に６月の祭りには人を殺して彼らの亡霊に捧げるよう判じた。また、虫や動物が彼らの田に入って作物を荒らしてもよい

とした。毎年６月の犠牲を捧げる祭祀には、ハニ族は家族を失って声を上げて泣いていた。泣き声が天神モミにも届き、耳の聞こえない神官が誤って下した判事でハニ族が災難にあっていると思ったモミは判決を変えることにした。ハニ族はお前たち（虫や動物）を何千万も殺してきたけれど、彼らが殺す人間は１年にたったの１人じゃないか。それではお前たちの恨みは晴らせない。毎年６月にはハニ族の老若男女を生きたまま空中に吊るすことにしよう。それを聞いた虫や動物たちは喜んで帰った。天神モミはオズとシピを人間界に遣わして天神のメッセージを伝え、毎年６月にはシーソーとブランコを高々と立てることにした。シーソーやブランコに乗りながら、大声を出して沢や林にいる動物たちに聞こえるようにし、人を殺す代わりに牛を殺して祀るようにした。山々の虫や動物は、ハニ族の老若男女が空中に吊るされ（ブランコをこいで）、木の棒の上に吊るされ（シーソーに乗り）天神の罰を受けたハニ族が苦痛な叫び声（シーソーに乗るときは人が喜んで出すワハハという声）を聞いて喜んだ。虫や動物は笑いながら山に帰り、ハニ族の作物を荒らさなくなり、天に訴えることもしなくなった。こうして、ハニ族は毎年６月には吉日を選んで牛を殺し、祭りを行うこととなり今に至っている。

写真41　オズとシピに作物を守ってもらうため案内する

「六月節」の活動は、その暦法からすると盛夏であることを示している。このころ、棚田の苗は穂を出し始め花を開く。その活動の目的は、古くから伝わるしきたりを除いて、田野の稲の豊作の預祝である。農業の順序からすると中耕と収穫の準備の段階であり、山に行って脱穀船を作り、畦の草を払い、田の間の道を整え、秋の収穫の時の便利をよくしておくころなのである。

3　収穫節日

ハニ族の豊作を祝う祭りは、チェシザCeilsiivq zaqといい、チェceilが稲、siivqが「新しい」zaqは「食べる」という意味である。それゆえ、漢語では「嘗新谷節」と称している。一般に陰暦８月の龍の日に行い、１日間である。龍の日をハニ語ではロノlaoqnaolといい、「増加する日」という意味を表す。それゆえ、漢字の龍から取られたというのは間違いなのである。日取りは場所によって違いがあるが、遅くとも陰暦８月15日は超えない。元陽県の小新街郷一帯のハニ族の選ぶ吉日は比較的統一されており、８月の最初の龍の日である。このころ、棚田の稲穂は黄金色に実り、一部の早稲は収穫が始まっているが、この祭りまでは新米を食べてはいけない。節日の１日は各世帯で新米を炊きこれを主食とする。また、豚肉、鶏肉、酒、茶を祖先に捧げる。新米の米飯は少しだけ犬に先に食べさせて、それから人が食べる。

写真42　チェシザ、新しい稲穂を捧げる　供物台（左）祭壇（右）
（左：元陽県全福庄2003年　訳者撮影　右：著者撮影）

大昔、人間は洪水に見舞われ、作物のすべては押し流されてしまった。水が退くと、１羽の小鳥が１本の稲穂を見つけて、うれしそうに梢の上に持っていった。木の下にいた１匹の犬がワンワンと吠えたので、小鳥は驚いて稲穂を地面に落としてしまった。犬がくわえてそれを家に持ち帰ったので、人は稲の籾を得た。それで、ハニ族は新米を食べる前にまず犬にあげるようになり今に至っている。

新米祭の活動の目的は豊作を祝うことである。暦法からすると、季節が盛夏から秋に入る頃である。農業の順序からすると秋の収穫の繁忙期の始まりであり、実質的に秋の収穫の序曲なのである。

これら述べてきた伝統的節日のほか、ハニ族は「春節」、「端午節」、７月の霊を送る儀礼[訳注22]、「中秋」などがある。

４　節日の昇華

ハニ族は哀牢山区の地理や気候から、棚田の農耕活動を取り巻く農事暦を作り出した。それには季節の移り変わりに各種の農事、祭祀や家庭生活をうまく配置している。それゆえ、ハニ族の農事暦は季節の移り変わりを基礎として、農業の順序と植物の変化や獣・鳥の出没にとても敏感である。月暦の変わり目には節日の祭祀活動と動植物の徴が対応している。例えば、山の上にノミザクラが赤々と咲くともう陰暦10月になったという意味になり、冬が来ていることを示している。このころ棚田の農業からすると田の切り株を犂起こし、畦を新しくして「一犂一耙」をする段階なのである。

[訳注22] これは紅河ではチャバナバQaq ba nal baqといい[楊六金1996:229]病気や悪い霊を払う儀礼として小規模であるが伝統的な儀礼と考えられており、アカの間ではゾロアプロZaoqlo apyuq lolとして村人全員で竹を鳴らしながら各世帯から持ち寄った木の棒を村門の外に刺す盛大な伝統儀礼として知られている。訳者もたしかに元陽でこれにあたる節日を見たことがないが、元陽では著者は伝統的でないとみなしているようである。おそらく、中国盆と習合している可能性が高い。

これまで述べてきたハニ族の節日は、月暦や季節の移り変わりを提示し、日々が過ぎていくことに文化的な意味合いを付与している。また、棚田の儀礼はこうした日をはっきりと見せることで、昔から代々受け継がれてきた世俗的な節目を作り出してきた。例えば、「十月年」は年頭の印であり、それがまた秋から冬への変化を示しているというようにである。農業の順序からすると、冬の耕作は「十月年」の前に終えておかなくてはならず、そうして人々は農閑期に入る。アマト祭りは「冷季」から「乾季」への移行を示し、農業の順序からすると冬の休閑期が終わり、春耕の準備の季節の始まりであり、春耕の繁忙期の序曲である。ミネナは春から夏へ移行したことを示し、農業の順序では春耕の繁忙期の終わりを意味する。クザザは盛夏に入ったことを示し、農業の順序では夏の中耕や田の管理の時期であり、秋の収穫の繁忙期への準備の仕事をする。このように、ハニ族のすべての節日は、農耕儀礼の時期を示しており、暦法からすると月や季節の移行を提示している。いいかえれば、月暦と農業の順序を提示するという二重の社会的機能を持っているのである。

Ⅶ　ハニ族棚田文化の世界遺産申請までの過程

1　棚田文化の構造

文化の構造について学者たちの意見によれば、大多数は、文化の構造は物質文化と制度文化と精神文化の３層から成っていると考えている。この三分法からみると、文化の構造上、物質文化は表層に属し、精神文化は深層に属し、その間の中層に制度文化がある。これらの内容からすると、物質文化とは人類の生活と生存の需要から創造された物質的産品およびそれが表現する文化であり、衣食住、交通などを含んでいる。制度文化は社会文化とも呼ばれ、個人と他人とを反映し、個体と集団の間の関係である。これには、政治、経済、文化、教育、軍事、法律、婚姻などの制度やこれらを実施する制度的な組織機構を含んでいる。精神文化とは、人類の社会的実践と意識活動において長期に育まれてきた価値観、考え方、道徳情操、美意識、宗教的感情、民族性などがあり、思想、法律、道徳、倫理、哲学、芸術、宗教などの意識形態などを主に含んでいる。

こうした理論に基づいて言えば、棚田の本質は物質的なものであり、人々が生存のために進めていく一種の物質的生産活動の方式であり、その文化の層は当然、物質文化の現象となる。しかし、ハニ族は棚田を開拓していく過程で、その物質的な生産を不断に改善して棚田の持続的な発展のために、必然的にその管理制度や運営機構を生み出した。それはまた、一族や村の掟、あるいは分水板での水の配分は、ハニ族の社会・歴史上の有効な管理の仕組みであり、ハニ族の制度文化の重要な内容である。ハニ族は歴史的に文字を持ってはいなかったけれども、長きにわたる棚田農耕と文化の伝承の過程で、口から耳へという方法で、数千行にもわたる史詩、神話、伝説、物語などを創り上げ、棚田農耕を行うに当たってそれを取り巻く一連の農耕儀礼活動など、豊富な精神文化を形成してきた。このように見てくると、ハニ族の棚田文化は物質文化→制度文化→精神文化というように順次発達してきたのであり、これは文化構造の発展法則に符合している。つまり、ハニ族の棚田文化は単に物質文化の現象なのではなく、文化の３層の層次を順々に融合させた関係なのであり、それぞれは相対的な独立性を持ちつつも、相互に依存し相互に制約し、一つの有機的全体を構成しているのである。ハニ族の衣、食、住、交通、人生儀礼、年周儀礼、

宗教、天文暦法、哲学思想などには例外なくすべて棚田文化の印が押されている。つまり、棚田文化こそハニ族の文化の根本であり、ハニ族文化の大きなシステムなのである。ハニ族こそは、中国の棚田文化の最も早い発明者であり、創始者の１つであるというべきであろう。棚田の発展と変遷あるいは現存しつつもなお発展中の棚田文化ということからすれば、ハニ族は古い農耕の最も持続的な発揚者であり、また完全なる保持者でもある。

２　棚田文化研究

「ハニ族棚田」という概念が最初に出てくるのは、20世紀の1950年代の「国家民族問題五種叢書」の１つである中国少数民族簡史叢書において、イ族出身の著名な学者である劉堯漢教授が執筆した『哈尼族簡史』（雲南人民出版社、1985年）の中の第７章第５節の「科学知識と文学芸術・棚田の創造」である。その中では次のように書かれている。「ハニ族は豊富な生産経験を有し、特に棚田の経営は最も代表性がある。雲南の多くの山岳民族はみな棚田を開墾できる。しかし、その数の多さ、技術の精緻さから、最も優れているのは紅河南岸のハニ族である」（哈尼族簡史:111-114）と、棚田にかんする史料から引証しながらこうした論断をしている。この後、徐々に関係の学者たちの注目するところとなっていった。雲南省社会科学院の王清華研究員は、1983年９月に初めて元陽に来て、山々を覆う棚田を見てショックを受けたという。この時からハニ族の山村に入って民族学のフィールドワークがなされるようになり、1988年に雲南省民族研究所が編集した『民族調査研究』の中の一篇「哈尼族梯田文化」（ハニ族の棚田文化）という一文の後、「哈尼族梯田文化」という概念は徐々に学界に受け入れられていった。1991年に毛佑全副研究員の著した『哈尼族文化初探』において、棚田文化は主要な一章を割いて描かれている。1993年３月に第１回ハニ族文化国際学術討論会が紅河州で開かれ、80本余りの論文が集まったが、その内40本近くは様々な角度からハニ族の棚田文化について述べられたものであった。また、会議期間中には棚田の中心地である元陽県で民俗文化の視察も行われた。ハニ族棚田文化は海を越えた。その中でフランス人写真家のヤン・レイマ(Yann LAYMA)は４度、元陽を訪れ、数千枚に亘る棚田の写真を撮影し、写真集を出版した。また、彼は映像人類学の題材として元陽の棚田を主題とした映画「山の彫刻家」（Les sculpteurs de montagnes 1993）を撮影し、ヨーロッパの国々で発表して、大きな反響を呼んだ。

20世紀の1990年代は、学界はハニ族棚田文化研究をますます重要視し、また芸術カメラマンも多くなった。代表的なものとしては中国民族撮影芸術出版社が出版した『哈尼族梯田文化』という大型写真集がある。論文も様々な学術雑誌に100余り発表されている。テレビ局もフランスのパリテレビ局、ドイツの国営放送、中国の４大放送局、雲南電視台などのメディアで報道された。1999年に王清華が雲南大学出版社から出版した『梯田文化論－哈尼族生態農業』は、ハニ族の棚田文化研究において専門書がなかったという空白を埋めた。その他、関連する研究成果としては『哈尼族文学史』、『哈尼阿培聡坡坡』（ハニ族叙事詩）『哈尼族梯田文化論文集』、『斯批黒遮』（葬送歌）、『哈尼古歌』、『寨神－哈尼族文化実証研究』、『哈尼族天道人生与文化源流』、『首届哈尼／阿卡文化国際学術討論会論文集』、『第四届哈尼／阿卡文化国際学術討論会論文集』、中央民族大学ハニ学研究所の『中国哈尼学』第１集～３集、『哈尼族文化論叢』第１集～３集など棚田文化を主題とした多角的な研究が進められた。

2002年12月には、第４回ハニ／アカ文化（哈尼／阿卡文化）国際学術討論会[訳注23]は、紅河州の棚田が比較的集中している元陽県と紅河県の２つの県で挙行された。会議には４大陸14カ国から200名近くの内外の学者が参加し、棚田文化が討論のテーマの１つとなった。全部で158本の論文が集まり、その中で80本余りが棚田文化について書かれたものであった。この会議でハニ族の棚田文化研究は深化し、ハニ族の文化製品についての基礎理論も定められていった。

これまで述べてきたことをまとめると、ハニ族の棚田文化は地縁を基礎とした文化景観である。その表層の形式からすると、ハニ族人民が依拠している生存の最も主要な物質的な基盤であり、それと同時にハニ族が数世紀もの間その生命と血汗を注ぎ込んだ創造物であり、千年以上の歴史文明としての結晶なのである。その深層の文化の内容から言えば、棚田はハニ族文化の根本であり、ハニ族文化の精神的象徴であり、ハニ族の歴史文化の大きな揺籃なのである。

3　棚田文化の世界文化遺産申請への過程

1995年の秋、雲南省社会科学院のハニ族文化研究の専門家である史軍超研究員とフランスの人類学者のラン・オーイェナー博士らの一行が元陽県の攀枝花郷の猛品の棚田地域を視察した時、オーイェナー博士が棚田文化をユネスコの世界文化遺産に申請することを提言した。その時から、史軍超研究員は元陽のハニ族の棚田を世界文化遺産に申請しようと考え始めるようになった。1999年１月に雲南省政府と雲南省委員会が主催した「雲南省建設民族文化大省研討会」において「元陽ハニ族の棚田文化奇観の保護と発展基地の建設の構想」という論文を発表した。この論文では、元陽ハニ族の棚田の歴史を系統的に論述し、中国の関連部門とユネスコに向かってその現状と世界文化遺産の申請について建議し、討論会においてこの論文は省委員会、省政府の領袖の首肯するところとなった。1999年の3月25日のハニ族文学研究会が発行している『梯田文化報』にその全文が掲載され、紅河州の領袖も、「元陽ハニ族棚田文化の世界遺産申請」について賛成の意を示した。当時の紅河州州長であった白成亮は史軍超等に申請案を起草させ、計画書を作成させた。

2000年の２月から６月にかけて、史軍超等は『元陽哈尼族梯田申報世界遺産方案』（略称、『申報方案』）、『紅河州人民政府元陽哈尼族梯田申報世界遺産組織機構』（略称『申報機構』）、『紅河州人民政府関於紅河哈尼梯田申報世界遺産的可行性論証報告』（略称『論証報告』）を起草した。『申報方案』において「元陽哈尼族梯田」の名称と範囲が示されたが、紅河州の領袖より提言があり、紅河州のブランドと文化の内容から考えて、名称を「紅河哈尼梯田」と改称された。選定された範囲は棚田の比較的集中している元陽県の勝村郷、攀枝花郷、牛角寨郷、新街鎮（すべて元陽県：訳者）を第１保護重点区とした。遺産の類型を「文化および自然遺産」とした。しかし、最終的な申請書では「文化遺産」として確定している。『申報機構』において報告されている委員のメンバーは、白成亮をグループ長として、副グループ長を胡麗琼とし、白成亮、胡麗琼、李揚、張衛東、陳強、莫飈、王洪斌、白克仰、倪鳳偉、陸忠明などである。２つ目の専門家グループとしては、グループ長を史軍超、副グループ長を李克忠として、史軍超、李克忠、白茫茫、楊羊就、王建華、熊正毅、李期博、白学光、許建初、裴盛基、傅永寿、陳丁昆、李少軍、李澤然、

訳注23　会議の名称のアカはタイ、ミャンマーのアカ族のことであるが、彼らはハニと歴史や言語的には同一といってよいほど近いが、ハニという意識はない。詳細は稲村（1996, 2002）参照。

白松、銭勇、李元慶など中央あるいは省の、文化、農業、林業、水利、建設、環境保護、ツーリズム、文物の各部門の専門家がいる。

2000年８月の第二回「雲南省建設民族文化大省研討会」において史軍超が発表した『対元陽哈尼族梯田申報世界遺産的調査研究』と『打世界頂級品牌－関於建立雲南省申報世界遺産戦略的建議和構想』（世界的ブランドの確立－雲南省の世界遺産申告の戦略と構想について）の２論文は会において大きな反響を引き起こした。紅河州政府の指導を通じて、多くの幹部、ハニ族の一般の人々、国内外の専門家の努力によって、多くの調査研究に裏付けられ、紅河州政府は「紅河哈尼梯田」[訳注24]を世界文化遺産に申請すること全州の発展計画に組み入れることを正式に批准した。2000年10月30日の『紅政報』［2000］141文書『紅河哈尼族彝族自治州人民政府関於将紅河哈尼梯田申報為世界自然文化遺産的請示』で雲南省人民政府へと報告された。この文書が「紅河哈尼梯田」の世界遺産申請の政府文書であり、また申請過程が正式なルートに乗った重要な印である。

2001年1月に紅河哈尼梯田申報世界遺産辦公室（「紅河哈尼梯田」世界遺産申請事務所）が紅河州建設局に設けられ、建設局局長の王洪斌が主任を兼任し、張紅榛と白勁偉が副主任として申請の日常事務に当たることとなった。同年10月、申請事務所は『紅河哈尼梯田保護管理暫行辦法』を策定した。この文書では「紅河哈尼梯田」の保護区域とその範囲を明確に規定した。核心区は元陽県の壩達、多依樹、猛品、麻栗寨を４大棚田地区、保護区は元陽県の新街鎮、勝村郷、牛角寨郷、攀枝花郷のなかの棚田地区、調整区として元陽、緑春、紅河、金平の４県の規模の大きい棚田地域を指定した[訳注25]。

2001年、紅河州人民政府は華凱園林発展有限公司に委託して正式な報告書である『紅河哈尼梯田申報世界遺産文本』を制作した。2001年10月9日に雲南省委員会組織部幹部培訓センターにおいて、紅河州人民政府は「『紅河哈尼梯田申報世界遺産文本』予審会」を開催した。会議は当時の紅河州州長の白成亮が主管し、参加したのは、雲南省世界遺産委員会副主任兼辦公室主任で省建設庁庁長の程政寧、副庁長の陳錫城、国家開発銀行昆明分行の副行長胡麗琼、紅河州人民政府副州長李保文らが参加していた。参加したハニ族の文化研究の専門家としては、史軍超、李克忠、白茫茫、楊羊就、王建華、傅永寿、李元慶、盧朝貴、張紅榛が参加し、建設庁の関連部門の責任者と本を作った華凱園林発展有限公司の専門家などが参加した。予審会では原文の世界遺産の材料の要求と規程は基本的に一致しており、修正後に世界遺産中国委員会で審査することが提案された（李克忠2002）。

2002年の初頭、紅河哈尼梯田申報世界遺産辦公室は『紅河哈尼梯田保護総体規劃』（棚田保護の総合計画）を策定し、世界遺産申請に対して元陽県の核心区の保護と発展についての科学的計画と法的なハニ族の棚田の管理の規範化の体制を整えた。計画の主な内容は、保護区の性質と範囲、保護の原則と目標、保護区の現状分析、民族文化の保護、水源林の保護計画、水資源および水と土の保全の分析、ハニ族の棚田保護区の土地利用計画、社会経済発展と住民の発展とのバランス、基礎的設備の計画、管理計画などである。その保護区の範囲は、元陽県の新街鎮、勝村郷、

訳注24 正式名称を示すためそのままにした。「族」がなく「州」がない名称であることに注意。詳しくは稲村(f.c.)。

訳注25 これらの概念は戦略的に交渉するためのもので、ユネスコ側の意向（規模の大小や重点の置き方など）に合わせて交渉するため様々な区域と異なる規模の棚田地域が幾重にも想定されていることがわかる。

牛角寨郷、攀枝花郷の４つの郷鎮、28の村役場、204の自然村、87,481人、面積280平方キロメートルを含み、その核心区は132平方キロメートルで４つに区分される。

(１)大瓦遮河区：保護区の東部で面積2,430ヘクタール、47の自然村を含み、区域の人口は約27,297人。主な村は多依樹寨、大瓦遮寨、高城寨など。棚田は大瓦遮河に沿って南から北へ向かっ礁礁磯砲て並んでおり壮麗な棚田景観である。

(２)麻栗寨河区：保護区の中央部に位置し、面積は2,190ヘクタール、55の自然村を含み、区域の人口は約20,459人。主要な村は麻栗寨、壩達寨、下主魯寨、倮鋪寨、全福庄寨、箐口寨などがある。棚田は麻栗寨河に沿って南から北へ向かって並んでおり壮麗な棚田景観である。

(３)碧播河区：保護区の南部に位置し、面積は3,430ヘクタール、74の自然村を含み、区域の人口は約16,229人。主要な村は阿党寨、阿勐控寨、東沙寨、一碗水寨、硐浦寨、勐品寨、保山寨などがある。棚田は箐溝谷に沿って東から西へ向かって並んでおり峻険な棚田景観である。

(４)者那河区：保護区の西部に位置し、面積は5,140ヘクタール、89の自然村を含み、区域の人口は約26,773人。主要な村は陳安寨、白勝寨、良心寨、牛角寨、果統寨、果期寨などがある。棚田は者那河上流の支流から南北に並んでいるものと西南から北東に並んでいるものがあり棚田が延々と連なる壮麗な棚田景観である。

「紅河哈尼梯田」の世界遺産申請作業は国務院にも及び、省州の関係機関の領袖も重視しており、また全州の人民を挙げて努力している。2004年6月28日～7月7日に中国の蘇州で開かれた第28回の世界遺産大会において同棚田は中国世界遺産の準備リストに挙げられた。これよりアメリカの*National Geographic*は「人工的湿地の手本」として元陽ハニ族の棚田をとり上げた。『中国国家地理』の2005年10月号で、中国の美しい風景のコンテストにおいて、「棚田と村落の調和したハニ族の村－雲南紅河県普村」は「中国で最も美しい６大郷村古鎮」として第２位に選ばれた。2005年の上海東方衛視（衛星放送局）と上海煙草集団連合が発表した「愛我中華欄目」（コラム）において、中国の「五度」として中華深度：故宮、中華高度：チョモランマ、中華風度：雲南元陽棚田、中華力度：黄河の壺口瀑布、中華速度：上海浦東が挙げられている。

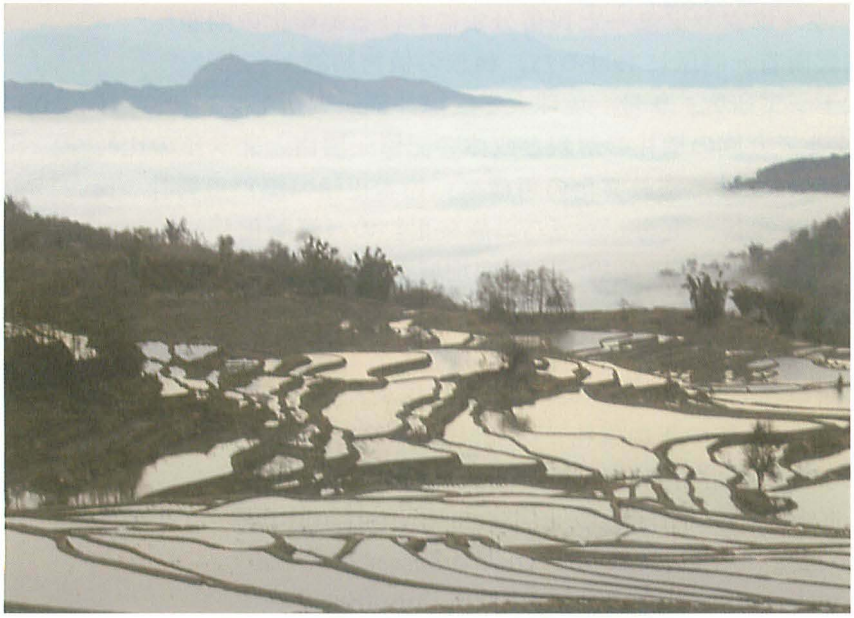

写真43　雲海のなかのハニ族の棚田

【原著引用文献】(文中で書名のあるものは省略した)
民族问题五种丛书
1982『哈尼族社会历史调查』云南民族出版社
1985『哈尼族简史』云南人民出版社
元阳县志编辑委员会编
1990『元阳县志』　贵州民族出版社 贵阳
李克忠 2002「步入世界遗产殿堂－红河哈尼梯田申报世界遗产描述」
『哈尼族文化论丛』第二辑　云南民族出版社　pp.30-52

【訳者参照文献】
尹紹亭 1999［1996］『雲南農耕文化の起源』上江洲均監訳　李湲訳　第一書房。
(原題 尹绍亭 1996《云南物质文化 农耕卷》(上)(下) 云南教育出版社)
稲村務
1996 「アカ族・ハニ族・アイニ族－中国雲南省西双版納州における『アカ種族』の国民統合過程」『東南アジア－歴史と文化』25号　東南アジア史学会　山川出版社 pp.58-82。
1997「北タイアカ族の時間意識」『族』28 号 筑波大学民族学研究室　pp.47-62。
2002「中国ハニ族の『支系』について —民族識別と『支系』概念の整理」
『歴史人類』３０号　筑波大学　歴史・人類学系紀要　pp.26-56。
2003a「イデオロギーとしての「他界」—雲南省紅河のハニ族の葬歌を通じて」
『比較民俗研究』19 号　筑波大学比較民俗研究会 pp.5-20。
2003b「日本古代史研究におけるハニ族資料の取り扱いについて：比較民俗学の進路」
『琉大アジア研究』４号　琉球大学法文学部付属アジア研究施設　pp.63-80。
2004a「ハニ族アマト儀礼における儀礼的表現」『アジア遊学』６３号　勉誠出版　pp.124-128。
2004b「哈尼族的昂玛突节——介于村落祭祀与亲族祭祀之间的仪式」
『琉大アジア研究』５号　琉球大学法文学部付属アジア研究施設　pp.53-60。
2008「ハニ語と中国語の間－ハニ語の中国語訳における知識人による表象の政治経済－」
『民族表象のポリティクス 中国南部における人類学・歴史学的研究』
塚田誠之（編）　風響社　pp.127-153。
2009「フォーク・タクソノミーと民俗分類における範疇化の問題
－中国雲南省元陽県におけるハニ種族の植物知識－」
『琉大アジア研究』９号　琉球大学国際沖縄研究所アジア研究部門　pp.3-64。
2010「ハニ族とアカ族の儀礼の解釈と政体の記憶—雲南と北タイの比較—」
『東アジアにおける宗教文化の再構築』鈴木正崇（編）風響社　pp.215-214。
f.c.「棚田、プーアル茶、土司　—『ハニ族文化』の『資源化』—」
『民族文化資源の生成と変貌 — 華南地域を中心とした人類学・歴史学的研究（仮題）』
武内房司（編）風響社。
小田亮 1994「宗教儀礼の諸相」『宗教人類学』佐々木宏幹・村武精一（編）新曜社 pp.116-125。
農林水産技術会議事務局 1988『写真でみる農具民具』農村統計協会
楊六金 1996「紅河ハニ族の年中儀礼」『比較民俗研究』13 号（稲村務訳）
筑波大学比較民俗研究会 pp.224-233。
A Committee of the Royal Institute of Great Britain and Ireland
1971(1951) *Notes and Queries on Anthropology.(Six ed.)*
Routledge and Kegan Paul Ltd. London.

［訳者あとがき］

本稿は、黄绍文 2007『玛诺阿美到哀牢山－哈尼族文化地理研究 Naoqma Aqmeil nei Hhaqlaol Haolgaoq Hevnei』云南民族出版社 350pp.（全 10 章）のうちの第 6 章「哈尼梯田：千年劳作対象到世界文化遗产的嬗变」（pp.119-188）を訳出したものである。

黄紹文氏は 1965 年元陽生まれの若手のハニ族出身の研究者である。写真の多くは著者から送られたもので、それにハニ語、地図、写真などを加えるなど細かな点まで問い合わせて訳出したため一部原著とは異なる部分があるが、より分かり易くなっていると思う。面倒な問い合わせに辛抱強く応えてくれた著者と調べ物を手伝ってくれた村上めぐみ氏（龍谷大学博士課程単位取得退学・元琉球大学科目等履修生）に感謝したい。

訳語のことでいうと、本文中の「〇〇神」という表現は、原文に沿って訳したが、ハニ語ではほとんどの場合「祖先」を表す Apyuq を冠して固有名詞を呼ぶ。例えば、天を司る天神モミ Apyuq Moqmil は天を司るとともに祖先でもある。名前と子孫を持っているという意味で「祖先」という語を使うならば、ハニ族の場合６０代にもおよぶ口頭の系譜には主な「神」は入っており、入っていなくとも傍系の「祖先」と意識されていることが多い。また子孫という語を霊的な存在をも含めるとなると万物の神霊もまた子孫と考えられていることが多い。その意味で最初の人間とされるスミオ Sul'mil'ol 以降の系譜上の祖先を「祖先」、スミオ以前の神霊を「祖先神」とすることが妥当であろう。しかし、中国語でも「祖先」と「神」を分ける用法は曖昧で、「神」という語で神格化された祖先を表すのは一般的であり、すべての「〇〇神」を祖先かどうか判別することは難しい。本文では原文を尊重しそのまま「〇〇神」としたが、ハニ族には名前や個性を失った柳田民俗学でいう「祖霊」や単なる汎神論的な意味での「神」はほとんどないと訳者は述べたことがある[稲村 2008:142-145]。

「祭り」にかんする訳語については祭祀、儀礼、節日、祭りなどの用語法をいかに配置し訳し分けるかという問題がある。祭祀という語は漢語でも多く用いられ、通常は祖先祭祀について用いられていることが多い。「祭り」をその日本語の原義である「祀らふ」ということからすると古英語の cult に近く、祭祀との区別は曖昧になる。しかしながら、ここでは「祭り」をもっとも広い意味で世俗的なものも含む語として使い、「祭祀」を限定的に使う。ここでは「祭祀」という語を cult に相当する学術語として「祭祀（cult）とは特定の精霊に関する信仰と儀礼の総体である。一般に特定の事物と場所に関連するとともに儀礼的崇拝と執行者に関係している」[A Committee of the Royal Institute of Great Britain and Ireland 1971(1951):180] という意味で用いることとする。この定義からは祖先や神霊などの信仰の対象が問題になる。原文では「農耕祭祀」という漢語が多く用いられているが、これは祭祀のうちの農耕関係のものの分類を述べているだけで、力点は祭祀される対象にはない。そのため一律に「農耕儀礼」と訳した。

「儀礼」という語については広い意味で、小田亮にならって「儀礼とは、特定の機会に反復される、状況の何らかの変化を目的とする行為で、その状況の変化という移行を非日常的な時空間において徴づける象徴的表現行為である」[小田 1994:123]としておく。ハニ語で儀礼にあたる語は一般に lol であり、これは年周儀礼にも用いられる。また、もっとも一般的に用いられる語は zaq の付く語であるが、これは「食べる」という意味であり、すべての儀礼には饗宴が伴うのでこの意味だけだと祝宴としたほうがよい。ここでは祝宴という語を世

俗的な饗宴を中心とした祭りとしておく。しかしながら、饗宴に象徴性や形式性がないわけではなく理念上の区分にすぎない。

年周儀礼という語でもよいが、ここではあえて原文どおりの「節日」を用いた。「節日」という語は漢語でも日本語でも一般的な用語法としては同様で、年周期の儀礼を指す。ハニ語でも「節日」を表す neeciiv という語は「日」を表す nee と「節」（せつ、ふし）を表す ciiv から出来ている。ciiv は手首、足首、指の関節、竹の節などのように日本語の節（ふし）に近いニュアンスの語である。また、世代を表す語でもあり、彼らが系譜（つまり歴史）や時間を区切るものとして竹や人体のメタファーを使っていることがわかる。neeciiv という語は Ssaqguq neeciiv（子供の neeciiv＝「児童節」）Yeiqdaf Neeciiv（元旦の neeciiv＝「元旦」）のように漢語の借用語に用いられていることから「節日」をハニ語に直訳した近年の漢語からの翻訳語のような気もする。また、neeciiv は「児童節」「国慶節」「旅遊節」など世俗的な節目にも用いられる。しかしながら、neeciiv が時間を「区切る」日であるという主張は原著の主旨でもあり、ここでは年周期のもので一年を分節化する儀礼（世俗的なものも含む）という意味で「節日」という語を使うこととしたい。ハニ族では暦が節日を決めるというよりは節日が来たら季節などの段階が変るという意識が明瞭であり、収穫もしていないのに収穫の節日をやるなどということは本来的ではない。

このように、「祭り」にかかわる語としては様々な語があり、相互に重なり合っているが、節日、祭祀は「祭り」「儀礼」の下位概念であり、祝宴は「祭り」に含まれても象徴や形式性の薄い饗宴の部分は儀礼とは概念上区別されるという図式になる。これらの用語法は学術語としても様々な立場があるが、翻訳上には一貫した用語法が必要で本稿に限るとしてもこのように概念を整理しておく必要がある。

本稿は中国雲南省の一少数民族の棚田についての体系的な記述であり、近年注目されている棚田農耕について考古学や歴史学との対話を目論んでいる。また、生態人類学、認識人類学、環境人類学、資源人類学の事例のテキストとしても使うことができるであろう。沖縄や日本の古代を思わせるような文化要素を見出すかもしれないが、そうした進化主義や伝播主義のような要素主義的な理解はかえって実証的研究には有害ですらある[稲村 2003b 参照]。しかしながら、これだけの体系性を備えた報告は貴重であり、もしも歴史文書や考古資料の解釈に役立つとすれば、モノや儀礼の織り成すある体系性から理解することが重要なのである。そうしたテキストとして読まれるならば、訳者の意図する訳業の目的は達したといってよい。

＊漢語によるハニ語の当て字対照

ハニ語は元来文字がなく、本稿のアルファベット表記は 1950 年代以降に中国で考案され、後に改正された「新ハニ文」と呼ばれる正書法を使用している。漢字の当て字は単に音訳であって文字の意味は全く関係がなく、単に誤解を与えるだけなので、訳文からは除外した。ハニ族に関する中国語書籍を参照する中国語読者の便宜のため当て字を挙げておく（カタカナ五十音順）。漢字でどう当てるか定訳が決まっているものもあるが、本来はどう書いても構わないものである。

アマ hhaqma 昂玛／アマオ hhaqma aol 昂玛奥／アマト Hhaqma tul 昂玛突／
アマトォ hhaqma tuol 昂玛拖 ／イェクザ Yailkuq zaq 耶苦扎／
ウテテ eeltevq tevq 欧斗斗／オドゥバラ hholduv ba'la 窩巴拉／オズ Hhoqzyuq 威嘴／
カオポ Kalhho po 康俄泼／ガタパ Galtaol pal 汤嘎帕／ガトト Galtaol taol 干通通／
クザザ Kuqzaq zaq 矻扎扎／ザテテ Zalteil teil 扎特特／
ザナアマ Zaqnaq aqma 扎納阿吗／シャオベ xal'aoqbei 香窩本／
シャハブ Xalhavpuv 相汗补／ジョザザ Jaoqzaq zaq 觉扎扎／シピ Silpil 石匹／
ズタ Zyutaq 直塔／ゼオバラ sseilhhol ba'la 惹巴拉／ゼクザ Sseilkuq zaq 惹苦扎／
ゼヌ Zeilnu 遮努／タポ Taqpaoq 塔婆／ツェガバラ ceivqgavq ba'la 从巴熱／
ツェシザ Ceilsiivq zaq 车拾扎／ツェラフシザ Ceilla hoqsiivq zaq 车拉合什扎／
デロホ Dei' laoq hoq 等罗合／トズ Taoqciivq 托子／
ニャアナ（ミネナのイチェ支系方言）Niaqhhaq Naq 仰昂纳／ハニ Haqniq 哈尼／
ベクアマ beilkuq aqma 本苦阿吗／プス puqseel 普师／プマト puvma tul 普玛突／
ミグ milguq 咪谷／ミネナ Miqnieiq Naq 莫昂纳／天神モミ Moqmil 莫咪／
ロホソ lolhovq soq 倮合说／ロノ laoqnaol 劳脑／